

秋田県立博物館【菅江真澄資料センター】

真澄

MASUMI
No.41



※表紙・裏表紙を見開きにご覧ください

「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介する広報紙です。



真澄、はじめての秋田

令和五年
三月二十五日(土)～五月十四日(日)

▼真澄、象潟で島巡りをする

真澄がはじめて現在の秋田県に入ったのは天明四年九月、にかほ市からでした。はじめて見る鳥海山を、真澄は旅の初期の写生帖である《粉本稿》に描いています。図説明文には「出羽の国、象潟の塩越というところにて図絵を描く。ここは漁師が多く住んでいる。鳥海山が高くそびえる様子を見ると、まるで田子の浦(富士見の名所として知られる場所。現在の静岡県富士市の駿河湾沿岸周辺)にいるかのようだ。世の中に富士山に比肩する山は、この鳥海山をおいてほかにはないだろう」と記しています。

真澄が訪れた当時の象潟は八十八潟九十九島と呼ばれ、無数の島々が潟湖に浮かぶ景勝地でした。真澄の図絵にも潟湖に舟が浮かび、島巡りをする様子が描かれています。この図絵に対応する内容が、日記《秋田のかりね》に詳しく書かれています。その内容から、真澄も島巡りを楽しんだことが分かります。



鳥海山と象潟の島々 《粉本稿》より
大館市立栗盛記念図書館蔵

※地名や市町村名については、現在のものに準じて表記しています

中橋から小舟に乗った。妙見島、稲荷島に向かう人が小さな橋を渡っていくのが入道島の陰から見えた。鳥の島、玄海島を舟が巡るうちに空が晴れた。能因島の向こうには鳥海山が見える。その姿は春先に富士山を見るようで、白雪がまだらに積もっていた。

(中略)

鍋粥島、兵庫島のあたりをこぎ進んでいると、葦の穂に鶏の尾羽を混ぜ編んだ「毛笠」というものを身につけた漁師が「おそさおそさと二声三声」と船音頭という歌を歌ってやってきた。やがてこの漁師が舟を寄せ、腰から鎌をとって海藻を刈り取ったあたりは、からす島、椎島、まがくし、今津島といった。

(中略)

しし渡り、つづぎ島とかいうところは、糸を引き渡したように細くつながっている。大島があり、夫婦島がある。松が二本生えているから「夫婦」であろうか。多くの島の中でも「親島」といえるのは、苗代島、平島、奈良島、弁天島、蛭子島だ。これらの島のかげでは、鶺鴒がくちばしをそろえて魚を食い、羽をひろげて岩の上にならんでいた

《秋田のかりね》より

真澄が島巡りを楽しみ、図絵に描いた風景は、それから二十年后、文化元年(1804)六月四日に起きた象潟地震によって大きく変化します。地震による地殻変動の影響で周辺の土地は隆起し、潟湖は陸地へと変わってしまいました。真澄が見た風景は二度と見られなくなってしまうのです。

▼真澄、はじめてハタハタを見る

にかほ市から由利本荘市に入った真澄は、矢島の地に滞在していました。そこで真澄は秋田の魚「ハタハタ」をはじめ目にします。

十月三日。霜が降りた。水が凍る寒さではあるが、空は晴れている。小春日和だ。体調が優れず、昨夜泊めてもらった家でそのまま休ませてもらう。ここから塩越(にかほ市象潟町)に行くには山を下れば近いのとこだ。魚を商う漁師が里に戻ってきた。「はたはた」という魚を売るといいうが、他の国では見たことがない魚だ。この魚は、冬の空がかき曇り、海が荒れに荒れて雷が鳴ると、喜んで群れてやってくるという。激しく鳴り響く雷のことを「はたはた神」というのはそういうわけであろうか。このあたりでは冬に入ってから、たびたび雷が鳴ると思っていた。南国とは空の様子が異なる。また「はたはた」を漢字で書くと、魚と神を並べ、鮓と書くという

《秋田のかりね》より

旧暦十月三日は、現在の十一月中旬頃。おそらく象潟の漁港から仕入れたハタハタでしょう。日記の続きから、このハタハタが翌日の市で商われたことも分かります。この時季の天候と「はたはた神」という言葉を結びつけて、ハタハタの名称について考察するあたりは、実に真澄らしい、と言えるでしょう。また、真澄が秋田の冬の天候に、少なからず驚きを感じていたことも分かります。

▼真澄、はじめての雪に難渋する

真澄が本格的に北国で冬を迎えるのは、この時がはじめてでした。真澄が特に苦労したのが「雪」でした。

十月七日。みぞれが降り、舟が出せないと言っているうちに雪になる。往來の道も絶え、足止めされる。煩わしい。

十月九日。家の屋根の上から雪が崩れてきた。地震が起こったかと思っただけ。十月十日。道が絶えたというが、雪の中をかき分けて進む。粗末な橋の上にも雪が積もって渡りがたい。見るのも恐ろしいほど勢いよく流れる谷川の上を、人に助けられてかろうじて渡る。雪の中を進むうちに誤って道に迷う。越中(富山県)の葉売りが二人通りかかり、その人らを頼りに進む

《秋田のかりね》より

旅を進めたい真澄にとって、行程を妨げる雪は非常に煩わしい存在であったようです。それでも雪の中、旅を強行しようと試みますが、かえって状況を悪くしてしまい、まさに踏んだり蹴つたりの有様でした。また屋根からの落雪は雪国でしか起こらない現象です。はじめての真澄にしてみれば地震と勘違いするほど、大いに肝を冷やしたことでしょう。

▼真澄、雪の良さを知る

雪に苦勞していた真澄ですが、少しずつその面白さ、楽しさにも気付いたようです。

十一月半ば。湯沢に行く。雪は六尺ほど約180^{センチ}の高さまで積もっている。子どもたちが集まって「はきざり」という細い板木を二本履いて、軒ひさしの上から何度も滑って遊んでいる。

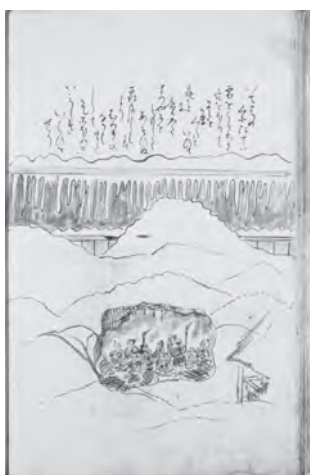
十二月半ば。「大雪や窓から見ゆる人の足」と詠んだ句があつたが、本当に高窓や軒ひさしの上に、行き交う人々のわらぐつが見える。

子どもたちは「かまくら」であそぶと言つて、家よりも高く積もつた雪に穴をあけ、その中に灯火をともし、様々なことを語つて一夜を過ごす。

早朝の雪景色は、美しい花を眺めるにも勝る。遠くの山など例えようがない

《秋田のかりね》より

子どもたちが様々な雪遊びをする姿や、雪が降り積もつたからこそ見ることができた光景に、「雪の良さ」を見い出していったようです。



かまくらの様子《粉本稿》より

大館市立栗盛記念図書館蔵

▼真澄、小野小町の古跡を巡る

前年の年末から年明けまでを湯沢市周辺で過ごしていた真澄は、雪解けとともに、湯沢市小野に点在する小野小町にまつわる古跡を訪れます。和歌詠みでもある真澄にしてみれば、六歌仙の一人として知られる小野小町に縁のある場所があると聞いては、訪れない理由はなかったのでしょうか。

天明五年四月十四日。小野小町の古跡を訪ねようと、湯沢を出て小野に向かう。その昔、出羽郡司であつた小野良実(小町の父とされる人物)が住んでいたあたりを訪ねる。「桐ノ木田」と呼ばれたその場所には堀の跡が残っていた。

また小町が自ら植えた芍薬があるといつて案内された。周囲を柴垣で囲んだ一角の中に、間もなく満開に咲くであろう芍薬の花が数多く茂っていた。

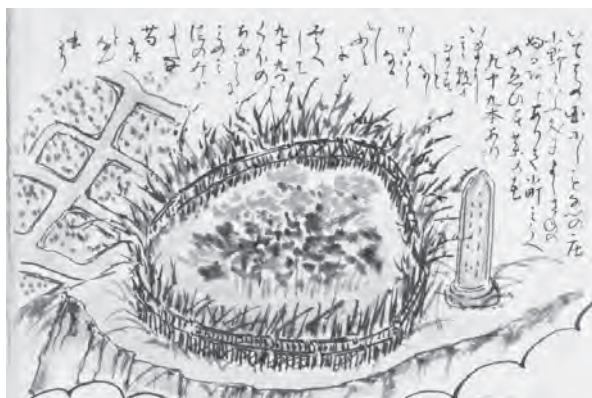
田に面したところに「二森」と呼ばれる場所がある。この場所は、小町が深草少将(小町を慕つたとされる人物)を偲んで塚を築かせ、また自らが入るためにもう一つ別の塚も築かせたという。「私が世を去つたならば、必ずここに埋葬するように」と言つて亡くなったと伝えられている。

また「岩屋」というところがあつて、そこは年老いた小町が住んでいた場所であるとされている

《小野のふるさと》より

訪れた古跡のうち、小町が植えたと思われる芍薬の花の図絵を、真澄は《粉本稿》に描いています。図絵を見ると、

周囲を柴垣で囲み、その中にたくさん芍薬の花が植えられていたことが分かります。残念ながらこの場所は現存しておらず、バス停の名に「芍薬塚」と残るのみです。



小町の植えた芍薬《粉本稿》より一部拡大
大館市立栗盛記念図書館蔵



令和四年九月撮影



各地を巡り歩き、その土地で見聞きした様々な事柄を記録した真澄ですが、その中には何とも奇妙で怪しげな話が含まれています。本展では真澄が採録したそうした「怪異譚」について、県内の民俗行事などを題材にイラスト制作に取り組んでいる、ささきゑびす氏の絵画とともに紹介しました。

真澄の記録の大きな特徴は、図絵を描いていることです。採録された怪異譚の多くは文章のみの記録で、図絵を伴っていません。ただその内容は多岐にわたり、興味深いものばかりです。真澄が採録した怪異譚を元に描かれたささきゑびす氏の絵画とともに、その魅力を感じていただける展示になりました。

▼化物坂

《雪の出羽路雄勝郡》第二巻より



沢口村(湯沢市稲庭町沢口)にある坂道の話。その坂道の東側には山神の社がある。雲が立ち込める日や、小雨が降る夕暮れなどにこの坂を通ると、男性であれば女性とすれ違い、女性であれば男性とすれ違うという。

また「ぬらりひょん」「おとろし」「野槌」などといった妖怪の類が「百鬼夜行」をすることもあるという。「さながら化物坂だ」という人もいる。坂の北側には民家がある。

絵に描かれている妖怪は、先頭から「ぬらりひょん」「野槌」「おとろし」となる。

▼姫ヶ岳

《筆のまにまに》第五巻より



でしよう」という。獵師が刀を女に渡すと、女は、はらはらと泣きながら「その犬こそ、三年間私が連れ添った最愛の夫だったのだ。夫の仇、思い知れ」といって、獵師の首を刀で刺し貫いた。連れの男は命からがら逃げ出し、麓に戻った。麓にいる人々に事の顛末を話し、再び女のいる岩屋に人々と共に向かったが、すでに岩屋はもぬけの殻で、女の姿も刀もなかった。以来、この山の名を姫ヶ岳と呼ぶという。

▼音鳴らす釜

《軒の山吹》より



小泉の雌雄の沼(秋田市金足小泉・男湯女湯)を見ながら、新城の荘、岩城(秋田市下新城岩城)に来た。昔、ここに岩城右衛門大夫康信という城主がいたという。古い城山の麓には、吉祥山福城寺といって臨濟宗の寺がある。

かつてこの城山には、その水を汲み尽くせば必ず雨が降るといふ不思議な井戸があった。ある年の夏、早はやが続

たため、降雨を願って井戸の水を全て汲んだ。水がなくなり、井戸の底に手を入れると、茶の湯で用いる「手取釜」が出てきた。蓋がなかったので、当初は木で作った蓋で覆っていたが、釜を所有した伊藤家の主が久保田の市に出かけ、そこで子どもが遊ぶ玩具の蓋を見つけて買い、試しにこの釜に付けてみたところ、鉄の色から錆びた部分までが寸分違わず一致したという。

時が経ち、伊藤家の主はこの釜を縁者に譲ることにした。ところが贈られた家で、この釜が音を立てて鳴り響くようになった。贈られた家の主人と奥方は気味悪がり、恐ろしくなつて釜を返した。さらにまた年月が過ぎ、伊藤家の主はまた別の縁者にこの釜を贈った。すると、その夜、釜は音を立てて鳴り響き、再び伊藤家に返されることになった。不思議なことに、伊藤家ではこの釜が音を立てたことは一度もないという。

真澄が《軒の山吹》に記録した「手取釜」の実物が現存している。釜は伊藤家から人手に渡った後、現在の所蔵者の元へ。『菅江真澄と秋田』（菅江真澄翁百五十年祭実行委員会・昭和五十三年）によると、専門家の鑑定で室町末期の天明産の手取釜であることが明らかになったという。ちなみに、現在の所蔵者宅で釜が音を鳴らしたことはないそうである。



《軒の山吹》館蔵写本より一部拡大



「手取釜実物」個人蔵（能代市）

▼太平洋山の三吉

《月のおろちね》より



太平洋山（秋田市）には「三吉」という神鬼がいて、姿を見た者もいるという。「山鬼神」ということであろうか。「樹神」や「魍魎」の類だろう。南の方の国々では、山中には「天狗」がいるとして様々な物語で語られるが、出羽・陸奥国では「大人」や「山人」といったものの存在のみが語られ、天狗のことはほとんど耳にしない。

ある年のこと、仙北郡外小友村（大仙市南外小友）の相撲取りが、酒三升を樽に入れ、しとき餅二升を担いで山に登ってきた。そして籠屋にいる人々に「この度、ハレの日の相撲があつて、何としても勝ちたい。この山の三吉殿にお力をお借りしたく参った。三吉殿はどちらか」と尋ねた。人々は驚きながらも「神様であられるので、いざこと

も定められない。あなたがそこだと思ふところにお供えして帰りなさい」と答えた。相撲取りは「弟子還」や「宝蔵岳」周辺の人々が登れない険しい岩の隙間にお供え物を投げ入れて帰った。数日後、宝蔵岳のあたりに空になった酒樽が転がっていた、と誰かが言っていた。

さて、その相撲取りは、ハレの日の相撲で見事、自分より大きな力士を振り投げて勝利し、人々から称賛されたとのこと。

霊峰・太平洋山に祀られる三吉霊神は「力の神」や「勝負の神」として知られる。相撲取りが必勝祈願したのもそれゆえであろう。里宮の太平洋三吉神社（秋田市広面）にて毎年一月十七日に行われる「梵天祭」は、荒々しく梵天を奉納するその様子から、通称「けんか梵天」とも呼ばれる。

※この他にも展示では、

▼有耶無耶の関

《秋田のかりね》より

▼川熊

《月の出羽路仙北郡》第五巻より

▼男鹿のモレビ 《粉本稿》より

▼影捕沼の化魚

《雪の出羽路平鹿郡》第一巻より

の四つの怪異譚を紹介しました。

未完の地誌を紐解く

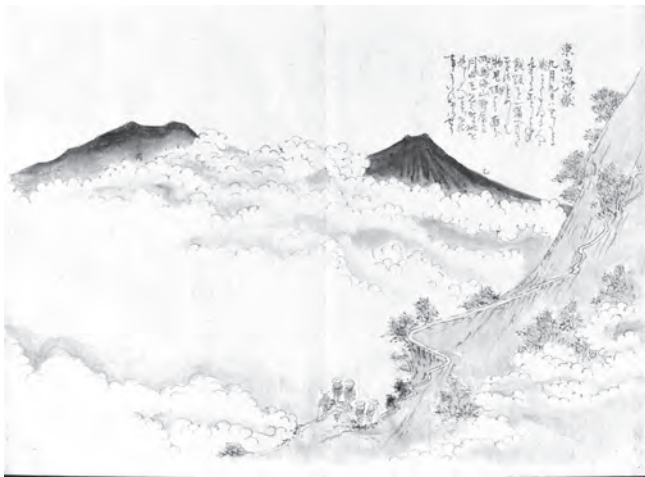
《雪の出羽路雄勝郡》と《勝地臨毫雄勝郡》

令和5年11月25日(土) ▶ 令和6年1月21日(日)

※展示では、『秋田叢書』第三巻及び『菅江真澄全集』第五巻に準じ、地誌《雪の出羽路雄勝郡》を五冊本として紹介しました。

◆《雪の出羽路雄勝郡》一巻より

【東鳥海山からの眺め(相河郷―中山村)】
 (東鳥海山の山頂を目指して登る途中)このあたりより見渡すと、雲海のかなたに鳥海山(右)と、月山(左)の二つの山がそびえる様が見えた。雲が晴れて、この二つの山が並んで見えた人には幸運が訪れると言われている。古くから人々に崇められ、朝廷からも高い位階を与えられた両山を同時に眺めることができるのだから、それも当然であろう。



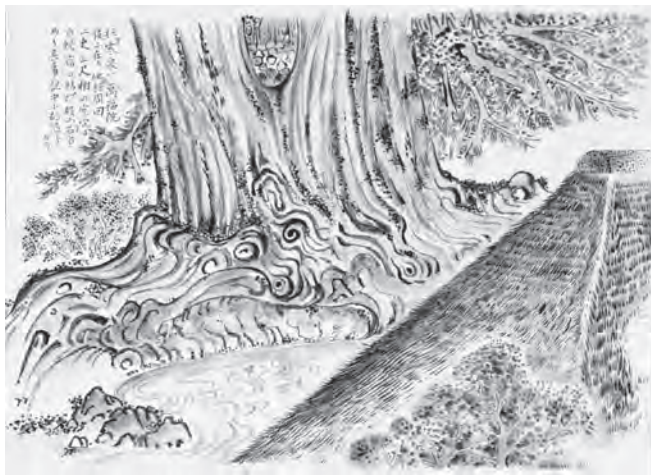
《勝地臨毫雄勝郡》一巻より

真澄の著作に、地誌《雪の出羽路雄勝郡》があります。文化十一年(1814)〜十二年にかけて、真澄が雄勝郡(現在の湯沢市・羽後町・東成瀬村周辺)の巡村調査をした際の記録です。しかし、これは草稿に過ぎず、真澄の記録の特徴である図絵を伴っていない、未完成のものでした。しかし、その巡村調査の際に描かれたと思われる図絵集《勝地臨毫雄勝郡》の存在が、この未完の地誌に光を当てます。

展示では《雪の出羽路雄勝郡》から特色ある内容をピックアップし、《勝地臨毫雄勝郡》全七冊の中に描かれている、関連した図絵と照らし合わせて紹介しました。

【万福院の大杉と清水(松岡郷―松岡村)】

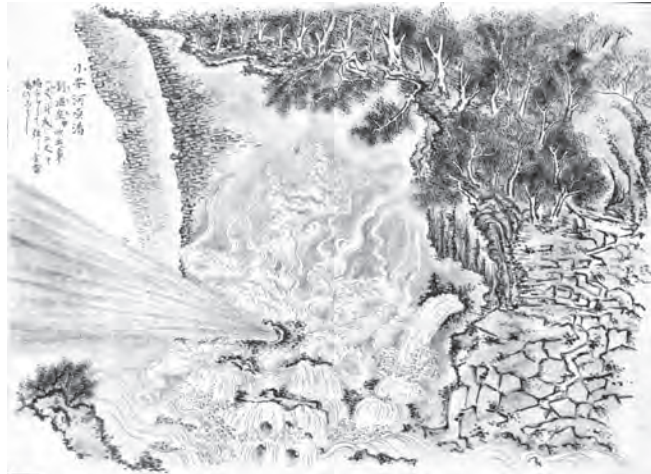
松岡寺という古い寺が残っている。今は真言宗に変わり、寺名も金峯山神宮寺万福院と改めた。この寺の後方に、周囲の長さがおよそ十メートルに及ぶ大杉があり、そのうろの中に白蛇がすんでいるという。それゆえ、鳥は決してこの杉に巣を作ることがない。また、杉の近くには清水が湧き出ており、その水はたいそう清らかで、仏様にもお供えする。「清水の大杉に鳥が巣を作らないこと」は、ここ松岡の不思議の一つとして知られている。



《勝地臨毫雄勝郡》二巻より

◆《雪の出羽路雄勝郡》二巻より

【小安峡大噴湯(河向郷―小安湯本村)】
 危うげで急峻な深い谷底におりようと試みた。およそ六メートルほどの高い壁のような岩を、蟹が這うようにして横向きに手をかけ、身を縮めながらおりると、割湯(大噴湯)があった。お湯が九〜十二メートルばかりも吹き出し、川を越えた向こう側の岩に当たって、霧となつて散る。割湯の岩穴ごとに湯気の雲が起こり、雷のような響きをして、大きく水を弾くようにお湯が吹き出している。



《勝地臨毫雄勝郡》四巻より

◆《雪の出羽路雄勝郡》三巻より

【泉光院の化物の正体（泉沢村）】

大滝山観音寺泉光院という寺があるが、すっかり荒れ果て、さらには化物が住むというので、ますます人が寄りつかなくなった。そうした折、少し風変わりな法師が寺に来て、「妖しい化物よ、出てきてみよ」と言って、松明をかざして寺の中を見て歩いていけると、お堂の隅に古い面が二つあるのを見つけた。この面が化物の正体であろうと、火をおこして、この二面を燃やしてしまった。この後、化物が出ることはなくなったという。二面のうちの一つは、焼け残っている。



《勝地臨毫雄勝郡》五巻より

【杉ノ宮大明神（杉ノ宮村）】

ここはたいへん古くからある土地である。昔は三輪ヶ崎といつて、大きな川の近くにある野原だったが、一夜のうち千本の杉が生えて杉原となった。このようにして神のお住まいとなり、神の御名を杉宮明神と申し上げたことから、村の名としているのである。



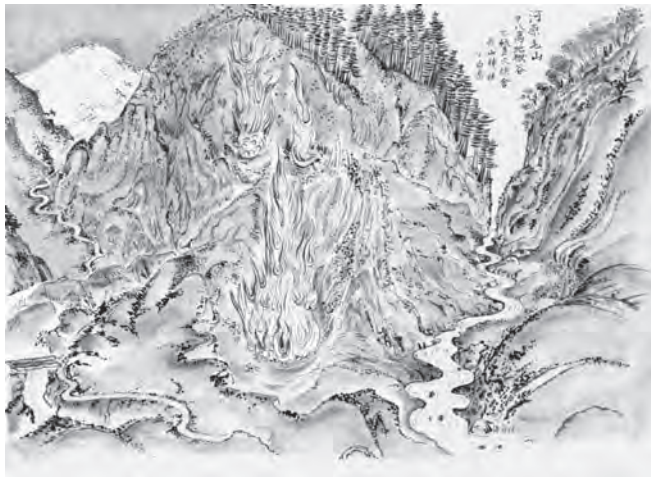
《勝地臨毫雄勝郡》三巻より

◆《雪の出羽路雄勝郡》四巻より

【川原毛地獄（高松村）】

（周辺を歩いて）屏風石、染屋の地獄などと、様々な地獄を巡っているうちに、地獄の山中で日が暮れてしまった。小屋が多く並んでいるところに行き、その長の家に泊めてもらう。

そこで聞いた話によると、かつてこの山では硫黄の火が燃え広がり、土がすべて真っ白になったという。ところどころに五葉松や雑木が生えている。



《勝地臨毫雄勝郡》六巻より

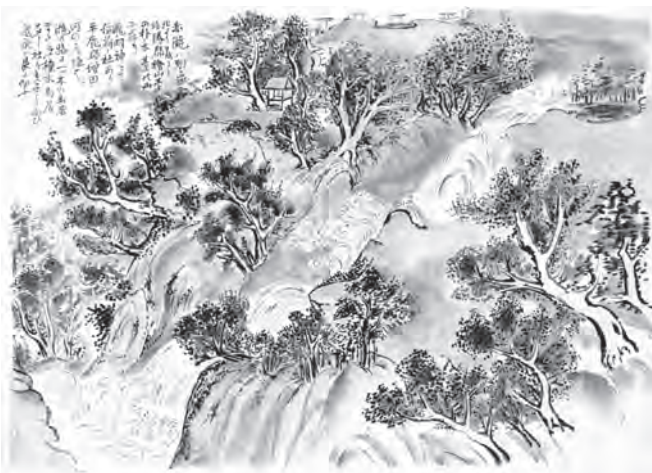
◆《雪の出羽路雄勝郡》五巻より

【檜山台村と赤滝（檜山台村）】

『六郡郡遊記』には「この村の東側には仙台藩領の西磐井郡や胆沢郡との境の村々があり、南側は同じく栗原郡との境になっている」とある。この村は親村で、近くに切留村という枝村がある。

栗駒山より須川の流れがあり、その流れを温泉後川、または赤川とも呼ぶ。滝が落ちるところでは赤滝川とも呼んでいる。

赤滝川に臨む高岸には赤滝明神の社が建っている。稲荷ノ御神を祀っているという。



《勝地臨毫雄勝郡》七巻より

表紙・裏表紙解説

表紙・裏表紙で紹介している絵のタイトルは「川熊」です。本紙四、五頁でも取り上げている「真澄採録怪異譚」展にて展示したものの一つです。真澄の地誌《月の出羽路仙北郡》第五巻に記録された話に次のようなものがあります。

「秋田藩初代藩主・佐竹義宣公が神宮寺村(大仙市神宮寺)周辺の雄物川で、舟に乗って鷹狩りをしていて、白鳥を撃ち落とそうと、公が舟の縁に鉄砲を立て掛けたその時、水中から黒毛に覆われた怪獣の手が飛び出てきて、鉄砲の筒をむんと掴んだ。公は大いに驚いたが、そのまま怪獣と鉄砲の引き合いになった。しかし、ついには引き負け、鉄砲は怪獣に奪われて水中に沈んだ。その後、水中から見つかった鉄砲は「川熊の御筒」と呼ばれ、筒には怪獣が握ったあとが残っていたという」

真澄の採録したこの話に出てくる「黒毛」「怪獣」「川熊」といったキーワードを元に、作者・ささきゑびす氏が想像して描きあげた一枚。「熊」をベースとしつつも、水中に棲んでいることから「河童」の要素が加味されています。



編集後記

令和5年度の部門展示のハイライトは、やはり「真澄採録怪異譚」展でした。主に県内の民俗行事や自然風景をモチーフとして作品を制作しているイラストレーター、ささきゑびす氏の協力のもと、部門としても初のコラボレーション展示という形で開催しました。真澄の記録した怪異譚は、非常に魅力ある内容のものが多いのですが、関連する図絵がほぼ描かれていないため、展示で紹介するには難しい面がありました。今回、その部分をゑびす氏の絵のお力をお借りすることでクリアし、展示開催にこぎつけることができました。この場を借りて、改めてゑびす氏にお礼申し上げます。

表紙・裏表紙で紹介した「川熊」の絵は、ゑびす氏の個展を訪れた際に、初めて目にし、今回の展示の着想を得るきっかけとなった「はじまりの一枚」です。

(角崎)

MASUMI
真澄 No.41

発行日◎令和6年(2024)3月14日
編集・発行◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足鳩崎字後山52
TEL.018-873-4121(代)